

コーパス分析に基づく「V+てくる」の共起傾向 —日本語母語話者と中国語・韓国語を母語とする学習者の比較—¹

夏 暁珂²

玉岡 賀津雄³

DOI: 10.18999/stul.39.85

要約 本研究は、日本語母語話者コーパス(JASWRIC)と外国人日本語学習者コーパス(I-JAS)を用い、「出る」「持つ」「飛び出す」「帰る」の4つの動詞を対象に、「V+てくる」の共起表現の使用傾向を明らかにすることを目的とした。日本語母語話者を基準として、中国語および韓国語を母語とする学習者の使用傾向を比較した結果、日本語母語話者は「帰ってくる」「飛び出してくる」といった共起表現を高頻度で使用する一方、学習者はいずれの能力群でも動詞単独の使用に偏り、共起表現はあまり使用していなかった。特に中国語を母語とする学習者は、母語に形式的・意味的な対応表現が存在しないため、共起表現を回避する傾向が顕著であった。これに対し、韓国語を母語とする学習者は、母語の「～아/어 오다」との対応を手掛かりでくるためか、比較的多く使用する傾向がみられた。さらに、各動詞に対する「てくる」の共起可否を、日本語能力・母語・動詞の3つの変数で予測する分類木分析を行った。その結果、動詞の種類の影響が最も強かった。加えて、日本語能力と母語は「持つ」「飛び出す」における「てくる」との共起頻度に影響し、母語の違いは「持つ」「飛び出す」「帰る」で現れた。韓国語を母語とする学習者は中国語を母語とする学習者よりも「てくる」を頻繁に共起させて使用した。以上の結果は、「てくる」と共起しやすい動詞や学習者の母語的背景を考慮した指導の必要性を示唆している。

キーワード V+てくる; コロケーション; 共起頻度; 日本語教育; コーパス; 分類木分析

1 Collocational Patterns of 'V + *te-kuru*' in a Corpus-Based Study: Comparing Native Japanese Speakers and Chinese/Korean Learners of Japanese

2 XIA, Xiaoke, Shanghai University, China. E-mail: replumbum@gmail.com

3 TAMAOKA, Katsuo, Shanghai University, China. Nagoya University, Japan. E-mail: ktamaoka@ge4.so-net.ne.jp

1. はじめに

「てくる」は動作や変化がこちらに向かうという空間的意味を基本に派生して、時間的経過や動作の完了などを表す補助動詞として使用される。「犬が走ってきた」のように動作の移動から、「涼しくなってきた」のように時間経過による変化、「ワクワクしてきた」のように心理的推移の3種類に分かれることが多い。しかし、こうした「てくる」多義性は、外国人日本語学習者にとって習得が難しいようである。特に、中国語では、「来(lái)」と「去(qù)」は、基本的に空間的な移動方向を表す動詞として機能し、「来」は話し手の方向への移動を、「去」は話し手から離れる方向への移動を示す。たとえば「他跑过来(彼が走ってくる)」や「他跑过去(彼が走っていく)」のように、主体の動作がどちらの方向に向かうかを明示する表現として用いられる。したがって、中国語を母語とする学習者にとって「来／去」は、動作の位置関係を明示する補語として理解されるのが基本である。これに対し、日本語の「V＋てくる」は、本来の空間的な移動を示す用法に加え、そこから拡張して時間的な変化や心理的推移を表す用法を持つ。空間的意味を基盤にしながら比喩的に拡張され、変化の過程や到来を表すアスペクト的機能を担うため、中国語を母語とする学習者にとって「V＋てくる」の理解と使用はかなり困難である。

一方、韓国語には「오다(来る)」「가다(行く)」を用いた補助的表現が存在し、日本語の「V＋てくる」「V＋ていく」ときわめて類似した機能を持つ(都基禎, 2008)。具体的には、韓国語では動詞の連結形に「오다」や「가다」が後接し、動作や変化の方向性を表すことができる。たとえば「뛰어오다(走ってくる)」は日本語の「走ってくる」に相当し、「뛰어가다(走っていく)」は「走っていく」に対応する。また、この形式は空間的移動の表現にとどまらず、日本語と同様に時間的・状態的な変化を表す場合にも用いられる。さらに、「추워져 오다(寒くなってくる)」「힘이 나 오다(元気が出てくる)」のように、韓国語では「오다」が変化や心理的推移を示す表現に用いられる。そのため、韓国語では「오다／가다」が空間的方向性のみならず、比喩的に拡張されてアスペクト的意味を担う点で、日本語の「てくる／ていく」に近い文法的性質を持つといえる。

そこで本研究では、日本語母語話者、中国語および韓国語を母語とする日本語学習者による「V＋てくる」コロケーションの使用傾向を、学習者コーパスを用いて記述的に明らかにすることを目的とした。具体的には、I-JAS コーパスに収録された5コマ・4コマ漫画「キー」「ピクニック」の記述作文データを対象に、「出る」「持つ」「飛び出す」「帰る」の四動詞に焦点

を当て、「てくる」との共起頻度・共起確率・共起パターンを指標として分析を行った。日本語母語話者を基準に、中国語と韓国語を母語とする日本語学習者を比較することで、母語の影響や日本語能力の要因が「V+てくる」コロケーションの使用傾向にどのように影響するのかを明らかにし、学習者の習得特徴を体系的に示すことを目指す。

2. 先行研究

日本語の複合形式「V+てくる」は、空間的移動を基本義としつつ、時間的進行、状態変化、さらには心理的推移や認知的変化を表す多義的な構造であることが指摘されてきた(今仁, 1990; 森田, 1994; 砂川, 2002)。プロトタイプ理論の観点からは、「Vてくる・Vていく」は物理的移動を基盤とし、比喩的拡張や文法化を経て時間的・認知的意味へ展開する過程として説明されている(Hasegawa, 1993; 温雅琚, 2000; 朴龍徳, 2015; 張曉, 2015)。また、コロケーションの観点では、山本(2007)が前接動詞の意味的特徴に基づき「てくる・ていく」の共起傾向を分類し、移動動詞・変化動詞・状態動詞などとの間に強い語彙的制約が存在することを明らかにしている。

対照研究においては、中国語と日本語の対照研究が多く行われてきた。陳湘奉(2017)は「ていく・てくる」と“去・来”との対応を分析し、補助動詞的用法では一定の類似が見られるが、時間的・心理的拡張用法ではずれがあることを指摘した。そして、誤用や回避の要因となることを示した。温雅琚(2000)は“起来・下来・下去”などの複合形式と「てくる・ていく」を比較し、両言語のアスペクト的意味における相違を指摘している。また、移動表現の視点選択については、日本語が固定視点を選好するのに対し、中国語は移動視点を好む傾向があると報告している(彭広陸, 2008; 盛文忠, 2013)。

韓国語に関しては、日本語の「ていく・てくる」に対応する「～아/어 오다/가다」が存在し、空間的移動の表現において高い類似性を示す。この点で、中国語の「来/去」が空間的意味に限定されるのとは異なり、韓国語は形式的にも意味的にも日本語に近接した対応を持つといえる。しかし、時間的進行や状態変化を表すアスペクト用法においては、日本語との間に必ずしも一対一の対応があるわけではない。たとえば、都基禎(2008)は、「오다/가다」が変化や心理的推移を示す表現に拡張される場合があることを指摘しているが、その使用範囲や自然さは日本語の「てくる/ていく」とは一致しないことを報告している。徐珉廷(2015)もまた、「ていく・てくる」を補助動詞的構文として位置づけ、韓国語における対応

表現を補助動詞型・並列型・合成動詞型に区分し、日韓両言語に共通性が見られる一方で、特にアスペクティブ用法において相違が残ることを示している。

第2言語習得研究(第2言語として日本語を学習する場合も含む)では、菅谷(2002)が学習者の習得過程を、空間用法から時間用法・認知用法へと拡張するプロセスとして示して以来、多くの研究で中国語を母語とする学習者が空間用法に依存し、拡張用法を回避する傾向が報告されてきた(李響, 2018; 周利, 2021)。韓国語を母語とする学習者についても、時間的進行や状態変化を表す用法の使用が限定的であることが指摘されている(蘇鷹, 2024)。これらの知見は、学習者の母語背景や習熟度が「V+てくる」の習得に大きく影響することを示している。しかし、既存の研究は主に用法レベルでの習得傾向を扱っており、学習者がどの動詞と「てくる」を共起させるのか、またその傾向が母語の背景によってどのように異なるのかについては十分に検討されていない。とりわけ、中国語が「来／去」によって空間的意味に限定されるのに対し、韓国語は「오다／가다」が時間的・心理的意味へ部分的に拡張されるという対照性を踏まえると、両言語背景をもつ学習者を同一の条件下で比較することは重要である。

このように先行研究では、「V+てくる」の意味拡張、言語間比較、習得傾向が多角的に明らかにされてきたものの、日本語母語話者を基準とし、中国語および韓国語を母語とする学習者を同一枠組みで比較して特定動詞との共起関係を統計的に検討した研究は十分に行われていない。本研究はこの点に注目し、母語背景別に「V+てくる」コロケーションの使用傾向をコーパスに基づいて明らかにすることを目的とする。

3. コーパスの出典

本研究では、動詞と「てくる」の共起頻度を算出するために、以下の2つのコーパスを使用した。まず、日本語母語話者のデータとしては、『小中高大生による日本語絵描写ストーリーライティングコーパス (Japanese Students' L1 Story Writing Corpus)』(石川ほか, 2023; 以下、JASWRIC コーパス)を用いた。次に、中国語および韓国語を母語とする日本語学習者のデータとしては、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language』(迫田ほか, 2020; 以下、I-JAS コーパス)を用いた。それぞれのコーパスについて概要を説明する。

3.1 JASWRIC コーパス

JASWRIC コーパスは、4枚の連続イラスト「鍵」と5枚の連続イラスト「ピクニック」を題材に、日本の小学生から大学生までが記述した作文を収集したものである。対象は、小学生1～6年生(1年生37名、2年生43名、3年生35名、4年生27名、5年生58名、6年生62名)、中学生1～3年生(1年生22名、2年生112名、3年生45名)、高校生1～3年生(1年生90名、2年生86名、3年生30名)、および大学1年生(53名)であり、合計700名の作文が収録されている。JASWRICは、日本語母語話者の児童・生徒・学生による作文コーパスとして最大規模である。本研究は、このうち700名による計1,400本の作文(総語数121,966語)を分析対象とした。

3.2 I-JAS コーパス

I-JAS コーパスは、12種類の異なる母語をもつ海外の日本語学習者、および国内の教室環境・自然環境で日本語を学ぶ外国人学習者の発話データと作文データを横断的に収集・収録した大規模コーパスである。I-JASの調査課題の一つである「ストーリーライティング(Story Writing)」は、JASWRICと同一の連続イラストを使用しており、学習者は2種類の連続イラストをもとに物語を日本語で記述する。本研究では、このストーリーライティング課題に基づく作文データを分析対象とした。具体的には、韓国語母語話者100名による200本の作文(総語数20,548語)、中国語母語話者200名による400本の作文(総語数41,419語)を用いて頻度データを算出した。また、両学習者の日本語能力は、日本語テストシステムJ-CAT(Japanese Computerized Adaptive Test; <https://j-cat.jalesa.org/> 一般社団法人日本語教育支援協会, 2020, 今井, 2006 参照)によって判定した。J-CATは聴解、文字・語彙、文法、読解の4セクションから構成され、それぞれ100点満点で、合計が400点満点である。インターネット上で受験可能で、時間や場所の制約を受けずに実施できる。得点は1から6までのレベルに区分され、本研究では学習者をこのレベル区分に基づいて分析した。日本語能力レベル別の人数分布は表1に示した。

なお、学習者の能力分布は2から5に集中しているため、本研究ではこの範囲の外国人日本語学習者を分析の対象とした。また、2と3のレベルを下位群とし、4と5のレベルを上位群として、独立サンプルの*t*検定を行った。その結果、韓国語母語話者($M=3.76$, $SD=0.89$)と中国語母語話者($M=3.39$, $SD=0.84$)の間には統計的に有意な差が認められた($t(287) = -3.43$, $p < .001$)。韓国語母語話者のほうが、中国語母語話者よりも日本語能力が

高く、学習者の日本語能力に有意な差があることが確認された。しかし、この差は 0.37 であり大きくないが、サンプル数が多く自由度が 287 であるため、容易に有意になったようである。そのため、6 節の分類木分析で、日本語能力を説明変数として加えて分析した。

表1 中国語および韓国語を母語とする日本語学習者の能力別人数分布

J-CATスコア	日本語レベル	中国語母語話者	韓国語母語話者
149まで	1	2	6
150-199	2	30	8
200-249	3	75	26
250-299	4	77	38
300-349	5	15	20
350以上	6	1	2
合計		200	100

4. 頻度計算と学習者人数に基づく頻度調整

JASWRIC および I-JAS から「V+てくる」を含むすべての用例を抽出し、共起する動詞ごとに分類した。ストーリーライティング課題の特性上、使用される動詞は比較的限定的である。そのため、本研究では日本語学習者コーパスにおいて使用頻度が特に高い「出る」「飛び出す」「持つ」「帰る」の4つの動詞を分析対象とした。なお、中国語母語話者と韓国語母語話者の学習者数には差があり、I-JAS には中国語母語話者が 200 名、韓国語母語話者が 100 名収録されている。この人数差を補正し、両集団間で均衡のとれた比較を行うために、韓国語母語話者の頻度値を2倍に換算して調整した(調整頻度 = 頻度 \times 200/100 = 頻度 \times 2)。韓国語母語話者のサンプル数は十分に大きいため、この補正によって生じる誤差は最小限であると判断した。また、日本語母語話者のコーパスである JASWRIC には 700 名の頻度データが収録されている。こちらも同様に中国語母語話者が 200 名に合わせて調整した(調整頻度 = 頻度 \times 200/700 = 頻度 \times 0.286)。この手続きを経ることで、異なる母語集団間において均衡のとれた頻度比較が可能となる。

5. 3つの言語間の比較—カイ二乗検定

4つの動詞それぞれについて、「てくる」との共起の有無(共起あり／共起なし)の頻度を算出し、3つの母語集団における分布の偏りを検証するために、適合性(あるいは一様性)のカイ二乗検定を実施した。さらに、「てくる」の使用有無と母語の違いが独立して影響しているかを確認するために、独立性のカイ二乗検定も行った。

5.1 「出る」のカイ二乗検定の結果

最も使用頻度が高く、日本語母語話者において「V+てくる」との共起が強く定着していると考えられる「出る」について検討した。2種類のカイ二乗検定の結果を表2に示した。適合性の検定の結果、日本語母語話者では「出る+てくる」の共起が非共起を有意に上回り($\chi^2(1)=40.01, p<.001$)、「出てくる」が定型的な表現として習慣化していることが示された。これに対し、学習者では共起と非共起の差が有意ではなく、使用はほぼランダムな分布を示した。さらに、独立性の検定も有意となり、日本語母語話者と学習者の分布に統計的に有意な差があることが確認された($\chi^2(2)=35.82, p<.001$)。

表2 「出る」のカイ二乗検定の結果

参加者	非共起	共起	適合性の検定	有意の方向
日本語母語話者	16	77	$\chi^2(1)=40.01, p<.001$	非共起<共起
中国語母語話者	31	28	$\chi^2(1)=0.15, ns$	非共起=共起
韓国語母語話者	82	68	$\chi^2(1)=1.31, ns$	非共起=共起
独立性の検定	$\chi^2(2)=35.82, p<.001$			

注: 中国語母語話者の200名を基準に頻度を調整した。

次の(1)から(3)の例に示すように、日本語母語話者は(1)のように「出てくる」を用いて話者視点からの到来性を強調する一方、学習者は(2)(3)のように「出る」を単独で用いる傾向がみられた。

- (1)そして、場所がきまって座ろうとしたとき犬が出てきました。(G01_006)⁴
 (2)でも、二人はバスケットを開いたら、犬が出ました。(CCH27)
 (3)お腹がすいた二人がバスケットの中を開けたとき、そこから犬が出ました。(KKD18)

この結果は、「出る」という方向性を示す動詞は単独でも動作の結果や到達を十分に表すことができるため、日本語学習者は談話上の視点移動や話者基点の提示といった機能を果たす「てくる」を付加する必要性を感じにくいものと考えられる。

5.2 「飛び出す」のカイ二乗検定の結果

「飛び出す」は突発的な動作性を含む複合動詞であり、「飛ぶ」と「出す」から構成される。本研究では、この動詞について、日本語母語話者と学習者の間で「てくる」との共起の有無に特徴的な違いが見られるかを検討した。2種類のカイ二乗検定の結果を表3に示す。まず、適合性の検定の結果、日本語母語話者 ($\chi^2(1) = 11.58, p < .001$) および中国語母語話者 ($\chi^2(1) = 47.10, p < .001$) は、ともに「飛び出す」を「てくる」と有意に共起させていなかった。これに対し、韓国語母語話者では共起と非共起の差が有意ではなかった ($\chi^2(1) = 1.60, ns$)。さらに、独立性の検定では有意差が認められ ($\chi^2(2) = 14.27, p < .001$)、「てくる」との共起の有無が母語の違いと関連していることが示された。この結果は、日本語母語話者と中国語母語話者がともに「飛び出す」を「てくる」と共起させない明瞭な傾向を示したのに対し、韓国語母語話者ではそのような一貫した傾向が見られなかったことを示している。

表3 「飛び出す」のカイ二乗検定の結果

参加者	非共起	共起	適合性の検定	有意の方向
日本語母語話者	57	26	$\chi^2(1)=11.58, p<.001$	非共起>共起
中国語母語話者	70	9	$\chi^2(1)=47.10, p<.001$	非共起>共起
韓国語母語話者	24	16	$\chi^2(1)=1.60, ns$	非共起 = 共起
独立性の検定	$\chi^2(2)=14.27, p<.001$			

注: 中国語母語話者の 200 名を基準に頻度を調整した。

⁴ 日本語母語話者番号は「G01～13(学年)_番号」で示す。学習者番号は「CCH・M・S・T(中国語を母語とする学習者)/KKD・K 韓国語を母語とする学習者(韓国語を母語とする学習者)+番号」で示す。

(4)の日本語母語話者と(5)の中国語母語話者が「てくる」を使用していないのに対して、(6)の韓国語母語話者が「てくる」を付加して使用例は以下の通りである。

(4)いざサンドイッチを二人は食べようと思ったら、中から犬が飛び出しました。(G04_015)

(5)バスケットを開けたが早いや、犬が飛び出して、ビックリさせました。(CCH03)

(6)サンドイッチを食べようとバスケットを開けた途端、犬が飛び出てきました。(KKD01)

この結果は、「飛び出す」という語自体が、「飛ぶ」という状態動詞と「出す」という方向性を示す動詞から成る複合動詞であり、その構造に突発的な動作性がすでに内包されているため、日本語母語話者があえて「てくる」を付加して使用しなかったことによると考えられる。また、中国語母語話者については、たとえば“跳出来”のように「動詞+補語」構造(以下、動補構造)によって経路や結果を明示できるため(Thompson, 1973; 劉月華, 1998)、「V-て-V」の形である「飛び出てくる」を用いる必要がないと解釈できる。これに対し、韓国語母語話者は、韓国語の方向表現「～아/어 오다」との形式的対応を手掛かりとして、「飛び出てくる」を使用する場合があると考えられる。

5.3 「持つ」のカイ二乗検定の結果

2種類のカイ二乗検定の結果を表4に示す。適合性の検定の結果、「持つ」は日本語母語話者において「持ってくる」という共起表現で頻繁に使用されていた($\chi^2(1) = 15.51, p < .001$)。一方、中国語母語話者($\chi^2(1) = 63.15, p < .001$)および韓国語母語話者($\chi^2(1) = 20.49, p < .001$)では、いずれも有意差が認められ、「持つ」を単独で使用する傾向が示された。さらに、独立性の検定でも有意差が認められ($\chi^2(2) = 70.07, p < .001$)、「持ってくる」の使用に関して母語集団間に明確な違いがあることが確認された。

この結果は、日本語母語話者が「持ってくる」を共起表現として定型的に使用しているのに対し、学習者では単独使用が顕著であることを示している。実際に例文をみると、日本語母語話者は(7)のように「持ってくる」を用いて動作主体が物を移動させる方向性を明示する一方、学習者は(8)(9)のように「持つ」を単独で使用する傾向が強い。

(7)ケンハ、近所から、はしごをもってきてしまいました。(G01_001)

(8)仕方ないケンハ二階の窓から家に入るつもりで、梯子を持って、部屋の前に立ちました。

(CCH16)

(9)彼女は寝ていました。そして、ケンは梯子を持って、それに登りました。(KKD43)

表4 「持つ」のカイ二乗検定の結果

参加者	非共起	共起	適合性の検定	有意の方向
日本語母語話者	22	57	$\chi^2(1)=15.51, p<.001$	非共起<共起
中国語母語話者	123	26	$\chi^2(1)=63.15, p<.001$	非共起>共起
韓国語母語話者	92	40	$\chi^2(1)=20.49, p<.001$	非共起>共起
独立性の検定	$\chi^2(2)=70.07, p<.001$			

注: 中国語母語話者の 200 名を基準に頻度を調整した。

この結果は、日本語母語話者が談話の文脈に応じて移動の方向性を明示する機能として「持ってくる」を使用していることを示している。一方、韓国語母語話者および中国語母語話者は、同様の場面においても「持つ」を単独で使用するに、「てくる」による方向性の付与しない傾向がみられた。これは、学習者が「持つ」を所有を表す状態動詞として解釈しやすいために、「てくる」を付加する必要性を認識しにくく、その結果、日本語母語話者のように移動方向や到達点を焦点化する表現を産出することが難しいのではないかと思われる。

5.4 「帰る」のカイ二乗検定の結果

2種類のカイ二乗検定の結果を表5に示す。適合性の検定の結果、「帰る」は日本語母語話者($\chi^2(1) = 10.53, p < .001$)、中国語母語話者($\chi^2(1) = 82.05, p < .001$)、韓国語母語話者($\chi^2(1) = 18.29, p < .001$)の3群すべてにおいて、「てくる」と共起させない傾向がみられた。さらに、独立性の検定でも有意差が認められ($\chi^2(2) = 18.88, p < .001$)、3群はいずれも「帰る」を単独で用いるものの、その使用傾向には母語背景による違いがあることが示された。

特に中国語母語話者では、「帰ってくる」の使用は1例のみであった。中国語では「回家」「回来」などの動補構造によって帰着や到達を表すのが一般的であり(Thompson, 1973; 劉月華, 1998)、移動視点を好む傾向が強い。そのため、発話者視点を明示的に取り込む日本語の「帰ってくる」とは構造的に異なり、この表現が自然に想起されにくいと考えられる(彭広陸, 2008; 盛文忠, 2013)。

表5 「帰る」のカイ二乗検定の結果

参加者	非共起	共起	適合性の検定	有意の方向
日本語母語話者	29	9	$\chi^2(1)=10.53, p<.001$	非共起>共起
中国語母語話者	85	1	$\chi^2(1)=82.05, p<.001$	非共起>共起
韓国語母語話者	44	12	$\chi^2(1)=18.29, p<.001$	非共起>共起
独立性の検定	$\chi^2(2)=18.88, p<.001$			

注: 中国語母語話者の 200 名を基準に頻度を調整した。

一方、韓国語においても、単独動詞「돌아가다(帰る)」のみで意味が十分に伝わる文脈が多く存在する。そのため、日本語の「帰る+てくる」のように方向性を二重に表す必要性が低く、学習者がこの表現を使用しにくい要因となっていると考えられる。

(10)の日本語母語話者では談話的に「帰ってくる」を選択する場面が確認できるのに対し、(11)の韓国語母語話者や(12)の中国語母語話者の産出では、到達を単純に「帰る」で表現する傾向が強い。

(10)ケンがしごとから帰ってきて、ドアを開けようすると、カギを忘れたのでドアがあきません。(G02_040)

(11)その日、ケン会社から家に帰って、玄関のドアのベルを鳴らしたが、返事がなかったです。(CCH09)

(12)ケンは夜遅く家に帰りました。(KKD23)

6. 分類木分析

学習者の日本語能力が「てくる」との共起使用に与える影響を検討するため、分類木分析を行った(詳細は玉岡, 2023 参照)。分類木分析は、複数の説明変数によってデータを階層的に分割し、目的変数を最もよく予測する要因を明らかにする統計手法である。本研究では、母語(中国語・韓国語)、日本語能力レベル(2~5)、および動詞の種類を説明変数とし、共起の有無を目的変数とした。なお、日本語母語話者は習熟度レベルを持たないため、この分析からは除外し、中国語および韓国語を母語とする学習者のみを対象とした。また、日本語能力レベル別の参加者数の偏りを調整するため、両母語集団についてはレベル別

の人数を基準に換算を行った。最終的に、分析に用いた頻度データの構成を表6に示す。表6は、母語・能力レベル・動詞の種類といったすべての組み合わせにおける頻度を一覧化したものである。

表6 分類木分析に使用した頻度データの一部

母語	日本語レベル	動詞の種類	共起の有無	頻度
韓国語	2	出る	共起無し	26
韓国語	2	出る	共起有り	4
韓国語	2	持つ	共起無し	4
韓国語	2	持つ	共起有り	4
韓国語	2	飛び出す	共起無し	0
韓国語	2	飛び出す	共起有り	0
韓国語	2	帰る	共起無し	8
韓国語	2	帰る	共起有り	0

図1に示したように、本研究では共起の有無を目的変数とし、母語、日本語能力レベル(2～5)、および動詞の種類の3つを説明変数として分類木分析を実施した。分析結果は、図2の樹形図に示した通りである。モデルの適合度を示す相対リスクの推定値は 0.24(標準誤差 = 0.016)であり、このモデルは全体で約 76%の予測精度を有することが確認された。

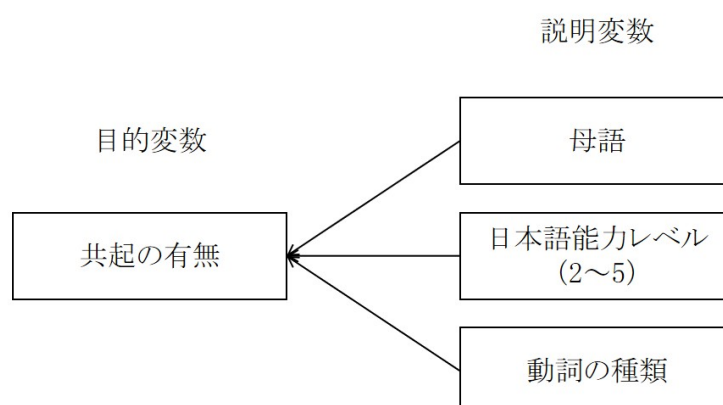


図1 共起の有無(目的変数)と予測する3つの説明変数の概念図

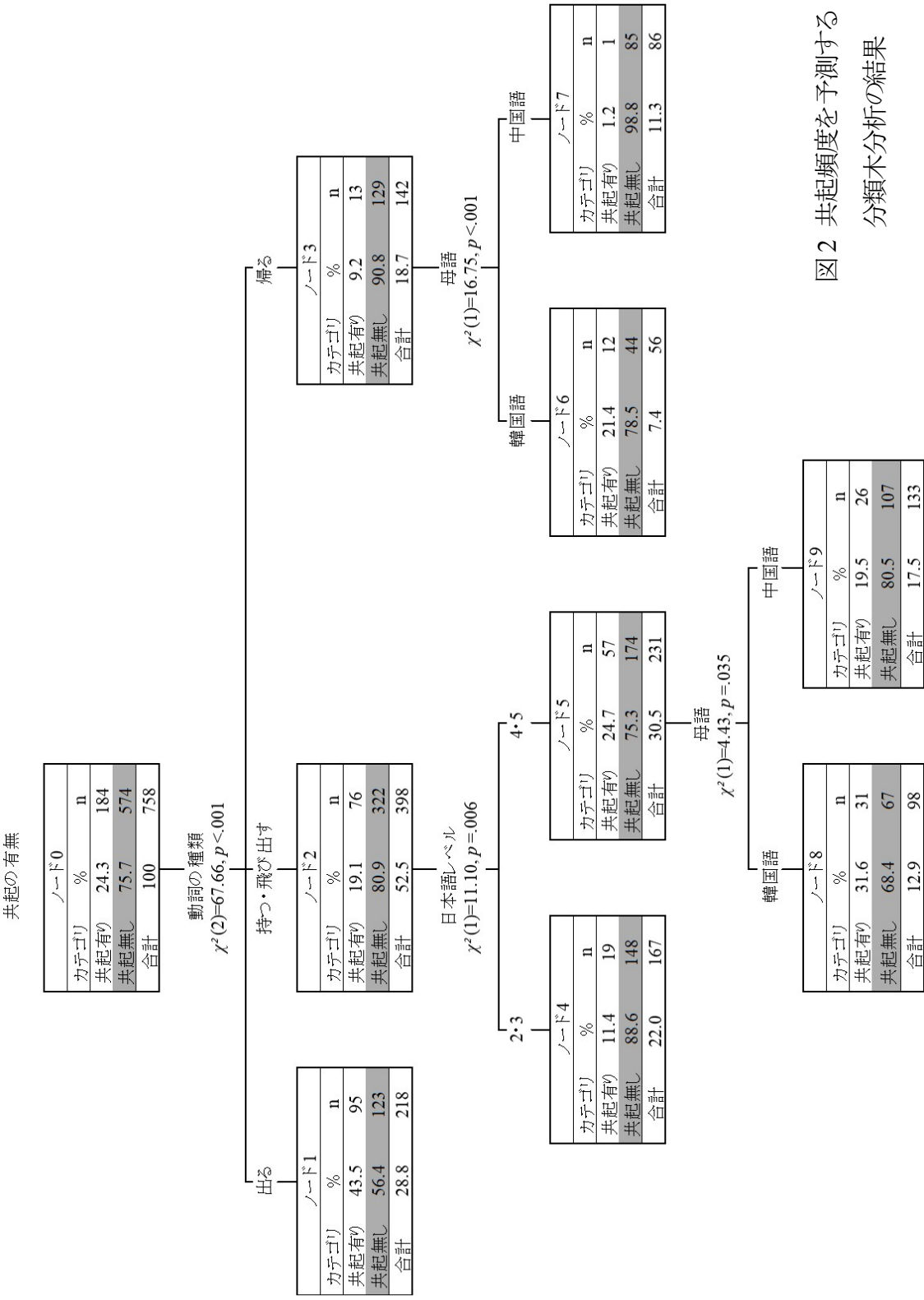


図2 共起頻度を予測する
分類木分析の結果

まず、全体の分布を示すノード 0 では、「共起あり」が 24.3% (184 回)、「共起なし」が 75.7% (574 回)であった。最初の分岐は動詞の種類によって生じ、カイ二乗検定の結果も有意であった ($\chi^2(2) = 67.66, p < .001$)。「出る」は「共起あり」が 43.5% (95 回)と比較的高い割合を示したのに対し、「持つ・飛び出す」は 19.1% (76 回)、「帰る」は 9.2% (13 回)と低い値を示した。次に、「持つ・飛び出す」のグループ (ノード 2) では、日本語能力レベルが有意な分岐要因となり ($\chi^2(1) = 11.10, p = .006$)、レベル 2 と 3 では「共起あり」が 11.4% (19 回)、レベル 4 と 5 では 24.7% (57 回)となり、能力の上昇に伴って共起率が増加した。

また、「帰る」のグループ (ノード 3) では母語による分岐が観察され ($\chi^2(1) = 16.75, p < .001$)、韓国語母語話者は 21.4% (12 回)が共起したのに対し、中国語母語話者はわずか 1.2% (1 回)にとどまった。さらに、「持つ・飛び出す」のうち日本語能力が高い学習者群 (ノード 5) においても母語の違いが確認され ($\chi^2(1) = 4.43, p = .035$)、韓国語母語話者の共起率が 31.6% (31 回)であったのに対し、中国語母語話者は 19.5% (26 回)にとどまった。

分類木分析の結果から、まず全体として「V+てくる」との共起が限定的であること (共起率 24.3%) がわかる。ただし、「出る」は共起率が 43.5%と比較的高く、一部の学習者は日本語母語話者に近い使用傾向を示していた。一方、「持つ」「飛び出す」「帰る」では共起率が著しく低かった。「持つ」「飛び出す」では日本語能力の上昇に伴って共起率が上昇する傾向が明らかとなった。すなわち、低レベル学習者 (レベル 2 と 3) では 11.4%にとどまったのに対し、高レベル学習者 (レベル 4 と 5) では 24.7%に達しており、能力の向上が共起表現を使用するようになる傾向がみられた。このことは、共起表現の習得が単なる語彙知識の蓄積だけでなく、統語的・語用的知識の発達にも依存していることを示唆しているといえよう。

一方、「帰る」は、日本語能力よりも母語が強く影響していた。韓国語母語話者の共起率が 21.4%であったのに対し、中国語母語話者はわずか 1.2%にすぎず、両者の差は統計的に有意であった。これは、韓国語に「～아/어 오다」という直接対応する形式が存在する一方で、中国語では動補構造によって経路や到達点を表すため、日本語の「V+てくる」との形式との対応が弱いことに起因すると考えられる。さらに、「持つ」「飛び出す」は、高レベル学習者群においても母語の違いが確認された。同程度の日本語能力を有する学習者であっても、韓国語母語話者の共起率は 31.6%であり、中国語母語話者の 19.5%を上回っていた。母語が長期的に影響することを示しているようである。

以上を総合すると、分類木分析は「V+てくる」の共起表現習得において、①動詞の種類、②日本語能力、③母語の構造的特性、という3つの要因が段階的かつ相互に影響し合うこ

とが示された。特に「帰る」のように母語の違い差が顕著に現れる動詞については、能力の上昇だけでは補えない習得上の制約が存在することが示唆される。

7. 総合考察

本研究では、カイ二乗検定および決定木分析を通じて、日本語母語話者と中国語および韓国語を母語とする学習者における「V+てくる」の共起使用の差異を明らかにした。その結果、まず日本語母語話者においては「出る」「持つ」といった動詞で有意に「てくる」との結合が多く、定型表現としての使用が強く確認された。これに対し、中国語を母語とする学習者では「持つ」「帰る」などの動詞において「共起無し」が圧倒的に優勢で有り、独立した動詞形としての使用にとどまる傾向が顕著であった。韓国語を母語とする学習者の場合、「飛び出す」や「帰る」においても「共起無し」が優勢ではあったが、中国語を母語とする学習者に比べれば「共起有り」を選択する割合が高く、日本語母語話者の分布により近い傾向を示した。これらの結果は、単なる頻度比率の違いではなく、統計的に有意な分布差として裏付けられた点に意義がある。

さらに、学習者データを対象とした決定木分析の結果、共起の有無を最も強く分ける要因は「動詞の種類」であった。「出る」は他の動詞に比して共起の割合が高かった。次いで日本語能力レベルが分岐要因となり、下位レベル(2・3級)に比べて上位レベル(4・5級)では「持つ」「飛び出す」との共起が多く観察された。このことは、学習の進展に伴い、学習者が「V+てくる」の定型的結合を習得していくプロセスを反映していると考えられる。さらに「帰る」に関しては、母語要因が大きく作用し、中国語を母語とする学習者では「帰る+てくる」の使用がほとんど見られなかったのに対し、韓国語を母語とする学習者では一定の割合で用いられていた。この違いは、母語における構文的対応の有無に起因すると解釈できる。

韓国語には「～아/어 오다」という形式が存在し、日本語の「V+てくる」に相当する構文が対応づけられやすい。そのため、韓国語を母語とする学習者は「帰ってくる」「飛び出してくる」といった表現を自然に取り入れやすいようである。一方、中国語では動補構造の形で動作と結果・方向が一体的に表される(Thompson, 1973; 劉月華, 1998)。ところが日本語では、複合動詞(V-V)と「V-てV」構造の双方が結果や到達点の表現であることが指摘されている(Kageyama & Shen, 2018; Matsumoto, 2021)。また、類型論からみると、日本語・韓国語は動詞枠付け言語(verb-framed languages)として、運動の経路を主に副詞的要素や複合構造

によって表す傾向を持ち、これに対し中国語は動補構造によって経路・結果を動詞後部に明示する「衛星枠付け言語(satellite-framed languages)」である(Talmy, 2000)。このような類型論的差異が、第二言語としての日本語における「V+てくる」構造の習得に影響する可能性も指摘されている(蘇鷹・夏曉珂, 2025)。中国語においては「跳出来」「走出来」のように動補構造で動作と経路を一体的に表すため、日本語の「飛び出す+てくる」「帰る+てくる」のような二段階的な経路表現を想定し難いようである。その結果、中国語を母語とする学習者は「飛び出す」「帰る」を単独の動詞として使用し、「てくる」を付加する必要性を感じ難いのであろう。この結果は、言語類型論的な枠組みに基づく母語の影響を裏付けている。

さらに、談話的機能の観点からみると、日本語母語話者は「帰ってくる」によって発話者の視点から対象の帰着動作を描き、時間的・空間的連続性を強調するのに対し、中国語を母語とする学習者はその機能を十分に把握できず、「帰る」単独で表現を済ませる傾向がある。他方、韓国語を母語とする学習者は母語における「오다・가다」構文の影響により、比較的早期にこの視点機能を習得できると考えられる。

以上の結果は、従来指摘されてきた「定型表現の習得の遅延」(Pawley & Syder, 1983; Wray, 2013)や「V ていく・V てくる」の習得が空間的用法から時間的・認知的用法へと拡張する段階性(菅谷, 2002)を支持するものである。加えて、本研究は、空間的用法においてすら母語干渉が強く影響し、中国語を母語とする学習者において「V+てくる」の結合が顕著に抑制される一方、韓国語を母語とする学習者は母語の構造的近似性を背景に早期から使用可能であるという対照的な傾向を統計的に示すことができた。すなわち、学習者が「V+てくる」を習得する際には、①母語の構造的対応の有無、②談話的視点機能の理解度、③定型表現習得の遅延、といった複合的要因が相互に作用していることが明らかになったのである。特に中国語を母語とする学習者においては「飛び出してくる」「帰ってくる」の習得が顕著に遅れることから、教育現場においては語彙知識に加えてコロケーションの習得を重視し、母語干渉を明示的に意識させる指導が不可欠であるといえよう。

8. おわりに

本研究では、日本語母語話者コーパス(JASWRIC)と日本語学習者コーパス(I-JAS)を用い、日本語母語話者と韓国語・中国語を母語とする学習者を対象に、「V+てくる」の共起表現の使用頻度を比較し、カイ二乗検定と分類木分析を通じてその要因を明らかにした。そ

の結果、以下は3点に要約できる。第1に、日本語母語話者は「帰ってくる」「飛び出してくる」といった定型的な共起表現を高頻度で使用する。一方、学習者は動詞を単独で用いる傾向が強い。第2に、学習者間でも差異が認められた。韓国語母語話者は母語の「～아/어 오다」との対応を手掛かりに比較的高い割合で共起表現を使用する。しかし、中国語母語話者は動補構造の影響により共起の形成が阻害されやすい。第3に、分類木分析の結果、母語だけでなく日本語能力の高低も共起表現使用に有意に関与した。とりわけ中国語母語話者では能力の上昇に伴い共起表現の使用率が増加する傾向が確認された。

これらの知見は、第二言語習得におけるコロケーション習得の困難性を示すとともに、母語干渉と日本語能力が相互に作用しながら学習成果に影響を及ぼすことを明らかにした点で意義がある。教育的観点からは、単なる語彙知識の拡充にとどまらず、「帰る+てくる」や「飛び出す+てくる」といった共起的結合をまとまりとして提示し、母語との違いを明示的に指導する必要がある。特に中国語母語話者には、「動詞+補語」構造と「V+てくる」構造の対照を通じて、方向性や視点の表現形式の相違を理解させることが有効であろう。また韓国語母語話者に対しては、母語との形式的類似に依拠するだけでなく、談話的機能や文脈依存的な使用を精緻化することが課題となる。

今後の課題としては、より広範な動詞や非空間的用法を対象に分析を拡張し、習得過程を縦断的に追跡することで「V+てくる」習得の全体像を明らかにすることが挙げられる。さらに、こうした実証的研究の成果を教育実践に還元し、母語背景に応じた教材設計や指導法の開発につなげていくことが期待される。

【参考文献】

(日本語の論文)

今仁生美 (1990). 「V テクルと V テイクについて」『日本語学』9(5), 54-66.

今井新悟 (2006). 「コンピュータを使った適応型日本語絶対評価システム: J-CAT 2005 Version」『大学教育』3, 133-143.

石川慎一郎・友永達也・大西遼平・岡本利昭・勝部尚樹・川嶋久予・岸本達也・村中礼子 (2023). 「小中高大生による日本語絵描写ストーリーライティングコーパス(JASWRIC)の構築:L1/L2 日本語研究の新しい資料として」『言語資源ワークショップ発表論文集』7, 393-416.

- 温雅琚 (2000). 「日本語『てくる／ていく』と中国語『～来／～去』の対照研究」『大阪大学言語文化学』9, 19-34.
- 周利 (2021). 「『てくる』における日中対訳の特徴と中国語を母語とする日本語学習者の使用状況との関係: I-JAS 中間言語コーパスに基づいて」『日本語・日本文化研究』31, 191-205.
- 徐珉廷(2015). 「韓国語の『kata(行く)』と『ekata(ていく)』のつながり」『学苑 総合教育センター 国際学科特集』5, 27-37.
- 菅谷奈津恵 (2002). 「日本語学習者によるイク・クル、テイク・テクルの習得研究-プロトタイプ理論の観点から」『言語文化と日本語教育』23, 66-79.
- 蘇鷹 (2024). 「コーパスから見えてくる『ていく・てくる』: 学習者と日本語母語話者の比較」『Learner Corpus Studies in Asia and the World』6, 133-146.
- 玉岡賀津雄 (2023). 『決定木分析による言語研究』東京: くろしお出版.
- 迫田久美子 (2020). 「I-JAS 誕生の経緯」迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (編著) 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門: 研究・教育にどう使うか』東京: くろしお出版.
- 朴龍徳 (2015). 「現代日本語における始動アスペクトを表す複合動詞の意味と機能: 認知意味論的アプローチによる考察」『大東文化大学』博士論文.
- 陳 湘奉 (2017). 「『ていく・てくる』と“去・来”の日中対照研究<研究論文>」『さいたま言語研究』1, 59-72.
- 森田良行 (1994). 『動詞の意味論的文法研究』東京: 明治書院.
- 山本裕子 (2007). 「<主観性>の指標としての『～テイク』『～テクル』」『人文学部研究論集』17, 67-81.
- 都基禎 (2008). 「日・韓両言語における『ていく』『てくる』と『-가다/-ka-ta』・『-오다/-o-ta』の対照研究」『佛教大學大學院紀要』36, 47-62.
- 李響 (2018). 「初級学習者に考えさせる指導法の試み: 『ていく』『てくる』の用法の理解を通して」『日本語教育実践研究論文集』平成 29 年度, 91-97.
- (中国語の論文)
- 彭広陸 (2008). 「从翻译看日汉移动动词「来る」/「行く」和“来/去”的差异」『日语学习与研究』4, 7-14.
- 刘月华 (1998). 『趋向补语通释』北京: 北京语言文化大学出版社.
- 砂川由里子 (2002). 『日本语句型辞典』北京: 外语教学与研究出版社.

- 盛文忠 (2013). 「移动动词“来/去”和“行く/来る”的汉日对比研究——基于移动主体人称的考察」『解放军外国语学院学报』01, 27-31.
- 苏鹰・夏晓珂 (2025). 「移动事件词汇化模式类型对二语习得的影响——以『V+ていく』『V+てくる』为中心的多语料库考察」『日语学习与研究』03, 72-83.
- 王源・山本裕子 (2020). 「从语用学视角考察『ていく・てくる』和“来/去”的功能」『高等日语教育』02, 90-100+154-155.
- 张晓 (2015). 「从认知语言学角度考察『ていく』和『てくる』的意义构造」『日语教育与日本学』01, 73-83.
- (英語の論文)
- Hasegawa, Y. (1993). Prototype semantics: A case study of TE K-/IK- constructions in Japanese. *Language & Communication*, 13(1), 45–65.
- Kageyama, T. & Shen, L. (2018). 6. Resultative constructions in Japanese from a typological perspective. In P. Pardeshi & T. Kageyama (Ed.), *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (pp. 193-226). Berlin, Boston: De Gruyter Mouton.
- Matsumoto, Yo. (2021). The semantic differentiation of verb-te verb complexes and verb-verb compounds in Japanese, In Taro Kageyama, Peter E. Hook, and Prashant Pardeshi (Ed.), *Verb-Verb Complexes in Asian Language* (pp. 139-164). Oxford: Oxford University Press.
- Nation, I. S. P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pawley, A., & Syder, F. H. (1983). Two puzzles for linguistic theory: Nativelike selection and nativelike fluency. In J. C. Richards & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and communication* (pp. 203–239). London: Longman.
- Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics: Volume I & II*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Thompson, S. A. (1973). Resultative verb compounds in Mandarin Chinese: A case for lexical rules. *Language*, 49(2), 361–379.
- Wray, A. (2013). Formulaic language. *Language Teaching*, 46(3), 316–334.

夏 晓珂 (上海大学外国語学院修士課程大学院生)

玉岡 賀津雄 (上海大学外国語学院教授, 名古屋大学大学院人文学研究科名誉教授)

Collocational Patterns of ‘V + *te-kuru*’ in a Corpus-Based Study:
Comparing Native Japanese Speakers and Chinese/Korean Learners of Japanese

XIA, Xiaoke

Master Course Student, School of Foreign Language Studies, Shanghai University, China

TAMAOKA, Katsuo

Professor, School of Foreign Language Studies, Shanghai University, China

Professor Emeritus, Graduate School of Humanities, Nagoya University, Japan

Abstract: This study investigates the usage patterns of ‘V + *te-kuru*’ collocations by analyzing a native Japanese corpus (JASWRIC) and a learner corpus (I-JAS), focusing on four verbs: *deru* (“exit”), *motsu* (“hold”), *tobidasu* (“run out”), and *kaeru* (“return”). Using native Japanese speakers as the baseline, this study compared the collocational tendencies of Chinese and Korean learners of Japanese. The results revealed that native speakers frequently used fixed collocations such as *kaet-te-kuru* (“come back”) and *tobidashi-te-kuru* (“burst out”), whereas learners across all proficiency levels showed a strong tendency to use verbs in isolation, with limited collocational usage. In particular, Chinese learners exhibited a marked avoidance of collocations, likely due to the absence of formal and semantic equivalents in their L1. By contrast, Korean learners, possibly drawing on the L1 equivalent form -아/어 오다, demonstrated a relatively higher frequency of collocational use. Furthermore, a classification tree analysis was conducted to predict the acceptability of *te-kuru* collocations across three variables: Japanese proficiency, L1 background, and verb type. The analysis indicated that verb type exerted the strongest influence, while proficiency and L1 background also significantly affected collocational frequency, especially with *motsu* and *tobidasu*. L1 differences were further observed with *motsu*, *tobidasu*, and *kaeru*, where Korean learners more frequently employed *te-kuru* collocations than Chinese learners. These findings suggest the need for pedagogical approaches that take into account both verb-specific collocability and learners’ L1 backgrounds when teaching ‘V + *te-kuru*’ expressions.

Keywords: V + *te-kuru*; collocation; collocational frequency; Japanese language education; corpus; classification tree analysis